

『極真への道を読んで』

堂園 美里

私は、この極真への道という本を読んで、いろいろ自分のためになることや、改めないといけないところなどがいろいろありました。

私が気になって読んだところが『親孝行は礼節の基本』という部分です。『自分を最も愛してくれた人の恩を感じ、その人を尊重し、その人に報いることなくして、社会に出て何が出来るというのだろう。親の恩恵がわからぬような奴には、師も友も恋人もできないであろう。できたとしてもすぐに見放されてしまう。私が人に空手を教える第一の意味は、そういう甘ったれた根性をまず追い出したいということだ。』と書かれていたところが、私の中で心に響く感じがしてよかったです。私は、親に対してたまに反抗したりすると、父にすごく怒られます。父はめったに怒らない人で、文句も一つ言わず、私は父をすごく尊敬します。父は、母のことを大切にしているなあと思います。そして、周りの人も大切にしていると思います。だからなのか父のことを敬う人は結構多いです。そのとき私は、『極真への道』を読んだことを思い出しました。やっぱり人を大切にしたりすることは、大切にされた相手からも大切にされてと、本当に私は父みたいな立派な人のことを大切にできる人になりたいです。母も尊敬しています。私は、今まで育ててきてもらった父と母に感謝し、尊敬していきたいです。

次に私がきになった部分は、『ライバルがあつてこそ』というところです。私はライバルというのは、本当に自分のやる気のスイッチになるなあと思います。私は一人で試合に出ることがなく、ほとんど同じ道場の子たちと試合をしていました。そこでは、自分の中でライバルとして意識をしている子がいました。でも、相手にはいつも負けてばかりでした。本当にくやしかったです。でも、近くにライバルがいたからこそ、もっと頑張ろうと思えました。なので私にはライバルがいらないといけないなあと思います。私は、ライバルの子を考えると、本当にうらやましく思ったりします。「つよいなあ、じょうずやなあ。」と思い、「あたしも絶対あんなふうになるし。」というふうにして今があります。本当に私にはライバルがいないとだめだということが、改めてわかりました。これからも、ライバルの相手を目指して頑張っていきたいです。

『黒帯になれたら』

堂園 美里

私が空手を始めたのは、小学6年生のときです。私は小さいときから空手にあこがれていて、近所に空手道場がなかったので、あきらめたときもあり、でもこの榎原の道場があると聞き、私は見学させてもらいました。やっぱり「いいなあ、あたしもやりたい。」と思い、空手を習わせてもらいました。最初は、いろいろ初めての体験なんで、すごく楽しかったです。そして、組手などをやったり、きつい稽古などが増えてきて、どんどん「嫌だなあ、組手痛いからしたくない。」と思ったり、よく手をぬいたりしていました。でも、初めて審査を受けさせてもらいました。そして、白帯からオレンジ帯になって、自分の中で今まで嫌だと思っていた組手なども、少しずつ慣れてきて、組手の楽しさを知りました。私は、次も帯が上がりたと思い、次の審査も受けました。最初に審査を受けたとき、私は飛び級をしていて、飛び級できると甘い考えで受けました。でも普通に一級上がるだけで、そのとき私は甘い考えじゃダメだと思い始めました。私は週2回の稽古も3回に増やして、少年部だけの稽古から合同の稽古になるだけで全然違って厳しく感じました。組手をするときも、今までと違って茶色帯の先輩とあつたときは、いろいろ効かされて、何回か泣いたときもあり、それがまた、組手があるから空手の稽古に行きたくないと思って、何回か休んだりを繰り返していると、母が「そんな空手を行ったり行かんかったりするんやったら、

空手やめろ。」と私に言いました。そのときに私は、嫌なことばかりから逃げてばかりしちゃダメだと改めて思い、言い訳して休むことがほとんどなくなり、自分なりに頑張っているときに、師範やいろいろな先生方に「上手くなってきたね。」と言って褒められ、また頑張ろうと思って努力して、やっと第一目標の1級になれました。1級をとるときもいろいろな試験項目があり、頑張って1級に合格することができました。そして私は今、黒帯を取られた先輩を見て、1級の審査よりも倍しんどいことをするし、本当に自分が思っている以上の稽古をしないと、甘く考えちゃいけないと改めて思いました。私は、黒帯を取ったときの責任やいろいろなことも甘く考えてはいけない、取るからには自覚をもってやりたいと思います。

私は、母があのと怒ってくれていなかったら、今の私はなかったかもしれません。

今まで師範や先生方がおっしゃってくださった細かいことも、しっかり頭に入れて、初心を忘れずにやっていきたいです。

黒帯を取れたら、しっかりした頼りがいのある、黒帯の先輩になって、下の子にもしっかり指導のできる先輩になりたいです。